

第八 爭議現下の實相及會社の立場

◎爭議團の動靜

會社提示の解決案に對し、爭議團側は凡有怨嗟と惡罵とを加へ、松岡氏が交渉を總選舉後に「延期」したるにも拘はらず、交渉は「決裂」せりと宣傳し、社員工員に對しては引續き暴行を逞うし、更に文書を發して「交渉は不調に陥れり」としてゐる。「延期」せられたるものを「決裂」とか「不調」とか揚言するは、その眞意奈邊に存するや想像するに難くないのであるが、眞に爭議の解決を望むものとしてはその措置甚だ穩當を缺くものといはねばならぬ。眞に圓滿なる解決を望むならば暫らく形勢を靜觀し團員は相互に輕擧を戒めて事態の自然なる展開を待つべきである。決裂宣傳は會見を複雑且陰暗ならしむる所以であつて解決遷延の因は専ら爭議團側の此の態度に因る次第であります。

獨り右に止まらず爭議團幹部は、團員に向つて猛烈なる煽動演説をなし、汲々として戰備を整へ、陽に反抗の牙を磨いて居ります。會社側が之等の事實を如何の感もて見又解釋するかは幹部のよく知る所であらう。かくの如きは決して解決促進を來す所以下ではありません。

◎會社の立場

會社としては上來縷述せる如く、今回の爭議は眞に已むなき必要に出でたる權宜の措置にして而も忍ぶべからざるを忍んで能ふ限り犠牲を少くせんとの目途の下に、すべての事をいたして參りました、これ等は既に大方御賢察の通りであります。

然し乍ら爭議經過が徒らに遷延することは不本意之に過ぐるものなきを以て、會見申込みは、爭議團側の局面打開の政策的のものなるべきかとも想像せられざるにあらざるも尙且襟度を示して、會見し、姑らく先方の云ふ所に聽從して解決案を提示したの